

猿若を舞う

初代中村勘三郎



豊臣秀吉、加藤清正に続き、ここ中村の出身として新たに注目を集めているのが、歌舞伎界の名門、中村屋の初代勘三郎。今年5月には中村公園に「初代中村勘三郎生誕像」が建立され、故18代目勘三郎の長男中村勘九郎さん、次男中村七之助さんによる記念のお練りが行われた。



大松の植え手、神皇正統記の松手、豊臣秀吉の像が景観整備されている。その一角に建立された「初代中村勘三郎生誕像」。顔は故18代中村勘三郎をイメージした

平成中村座の公演を契機に 初代勘三郎生誕地として着目

平成18年9月24日から27日までの4日間、名古屋平成中村座が同朋高等学校の体育館で開催された。第18代目中村勘三郎襲名披露を兼ねた興行で、平成中村座の全国巡業の一環だった。公演に先立って行われた記者会見の場では「初代の出が、名古屋の中村なんです。だからどうしても中村でやりたかった」と意気込みが語られた。

初代中村勘三郎の出自は定かでないが諸説あるが、江戸時代後期の肥前国平戸藩主、松浦静山の随筆『甲子夜話』に「生國尾州愛智郡中村」と見える。

また、中村一氏の末弟、中村右近の孫が初代勘三郎という説がある。阿部正信が天保14（1843）年に著した駿河国の地誌『駿国雑志』に「中村一氏は尾州中村の住人中村孫平次一政の子なり」と記されていて、初代勘三郎と中村の繋がりをうかがわせる。

口伝ですが、と前置きしながら「大鳥居からの参道の中ほど、セブン・イレブンのあたりに一氏の屋敷があったと伝わっています」と豊國神社の近藤一夫宮司が教えてくれた。

これらを背景に、初代勘三郎の生誕地として、中村区の活性化を図ろうという気運が高まるも、具体的な動きは昨年10月の「初代中村勘三郎生誕像を中村公園に建立する会」結成が緒となる。同会は、地域おこし

に取り組む地元有志によるボランティア団体「中村区夢づくり実行委員会」が母体で、翌11月から寄附金の募集を始めた。そして今年5月28日、像の建立式典とお練りが行われ、参道には多くの人々が詰めかけた。

常設の芝居小屋を起こした 江戸歌舞伎の祖、初代勘三郎

初代中村勘三郎は慶長3（1598）年の生まれで、京都で大藏流狂言の芸を学び、歌舞伎に転じて舞踊「猿若」を創作した、と伝わる。元和8（1622）年に江戸に下り、寛永元（1624）年、中橋南地（現在の京橋付近）に江戸で初めての常設の芝居小屋、猿若座（のちの中村座）を建て、興行を始めた。これをもって江戸歌舞伎の発祥という。江戸時代後期の浄瑠璃作家、鳥亭鳶馬が江戸歌舞伎の歴史をまとめた『花江都歌舞妓年代記』にも、「江都芝居の始」としてそう述べられている。

「猿若江戸の初櫓」という演目がある。猿若（初代勘三郎）が出雲のお国と江戸に入り、芝居小屋を立ち上げるまでのエピソードを描いており、18代目中村勘三郎襲名披露公演の幕開けで演じられたのが、この「猿若江戸の初櫓」だった。ただ演目のような歌舞伎の祖とされるお国と、江戸歌舞伎の祖、初代勘三郎との接点は明らかでない。

猿若座はその後、日本橋の瀬川町を経て、堺町に移るが、明暦の大火で焼失した。息子の勘次郎（勘二郎、



フリモAR

フリモARで
動画をチェック!
お練りの様子が
流れます

人力車から笑顔を見せる中村勘九郎さんと中村七之助さん。「こんなにも多くの人に集まっていたら、うれしいです。初代中村勘三郎の像を、みなさまのご協力で建立することができました。初代の魂を引き継いで、これからも一生懸命がんばっていきます（勘九郎さん）」「中村の地でお練りができたこと、誇りに思います。今日うれしかったのは、以前、平成中村座を開催した同朋高校の生徒さんや卒業生がたくさんいらして、沿道の整備などをしてくださっていたこと。一つひとつが受け継がれているのは歌舞伎と同じだと本当にうれしかった（七之助さん）」

初代勘三郎の生誕地として、中村区の活性化を図る

盛大に開催された像のお披露目とお練り



1 35,000の人出があった当日、小鳥居前で中村勘九郎、七之助両名による挨拶があった 2 松蔭高校和太鼓部が演奏でお練りを盛り上げた 3 式年遷宮の御用材は、加子母を含む木曾山から伐り出される。それらの木々を保護した秀吉と、加子母にある芝居小屋「明治座」の名誉館長を務める中村七之助さんにちなみ、加子母木遣り保存会がお練りの先導をした 4 勘九郎さん、七之助さんと除幕がなされると、一斉に拍手が響いた

中村区にこんなにも
人が集まるのかというほど、
たくさんの人出で驚いています。
活気があってうれしい。
今日は撮影班として頑張ります!

同朋大学
文学部人文学科
映像文化専攻

山口 黎くん
(右・4年生)

田中 一朗くん
(左・4年生)



建立する会では像をシンボルとして、初代勘三郎の生誕地であることを広く発信するとともに、中村屋名古屋後援会の結成なども視野に入れながら、さらに事業を推し進めていくとしている。

勘治郎とも。二代目勘三郎」と上洛して、後西天皇の前で「猿若」を演じる。万治元（1658）年、江戸で没した。

名古屋市中村区と中村屋、さらに太閤秀吉との縁が結ぶ

中村屋の屋号は、中村が由来といわれる。その中村は豊臣秀吉の出身地としてよく知られ、前述の中村一氏は豊臣政権の三中老職に就いていた。

平成22年の大阪平成中村座公演の

記者会見で「大阪城の天守閣が見えるような場所でお芝居をやらせてもらえる、本当にありがたいと思っています。太閤様と初代中村勘三郎は、出身が同じ尾張・中村ですし、以前ドラマで秀吉様を勤めさせていたことがこともあり、私も父（17代目勘三郎）も太閤様が大好きでした」と話していたように、故18代目中村勘三郎こそが中村区と中村屋、秀吉の3者を結びつけた。

その縁が形となったのが、このたび建立された「初代中村勘三郎生誕

像」。初代勘三郎の肖像画は残っておらず、像は演目「猿若」の舞い姿や扮装（粗末な青系統の単衣に脚絆を履き、手拭のような布で頬かむり）に、顔は亡くなった18代目勘三郎に似せたようだ。「舞台に出てくるだけで客席が沸く、そんな多くの人が親しまれていた18代目にするのが良いのではと、ご家族の了承も得たことです」と近藤宮司。



豊國神社
近藤 一夫宮司